

研修生だより No.17 5 / 24 ~ 6 / 6

社会福祉法人建昌福社会 帖佐すずらん保育園 福富

日付	時間	活動内容 & 場所
5月24日 (日)	15:25  18:55	ドイツ ミュンヘン (トランジット) 出発  フィンランド ヘルシンキ到着
5月25日 (月)	8:00  14:00 14:30	Pilke Home in Nature daycare centre Kesäkumpu (ピルケ保育園ケサクンプ自然園) 見学・質疑応答 ヘルシンキ市立図書館「Oodi (オーディ)」 見学 フィンランドの保育事情の解説講義
5月27日 (水)	8:30	ポルヴォー市立保育園「Eestinmäen päiväkoti」 (エースティマキ保育園) 見学・質疑応答 ポルヴォー市教育委員会幼児教育課長 Lena Karlsson 氏より行政側からの幼児教育・保育サービスの説明・質疑応答
5月28日 (木)	9:00  14:00	エスポー市立保育園「Kivimies päiväkoti」 (キヴィミエス保育園) 見学・質疑応答 フィンランドの保育事情の解説講義
5月31日 (日)	10:00	ヘルシンキ日本語補習校 運動会 見学
6月4日 (木)	9:00  11:00	Leikkipuisto Intia (公立プレイパーク) 見学・質疑応答 Leikkipuisto Filpus (公立プレイパーク) 昼食配給の見学
6月6日 (土)	13:55 16:35 18:00	フィンランド ヘルシンキ出発 ドイツ フランクフルト (トランジット) デンマーク コペンハーゲン到着

フィンランドの独立には、ロシア皇帝アレクサンドル1世と2世の政策が大きく影響しました。1809年、アレクサンドル1世はスウェーデンから割譲されたフィンランドを「フィンランド大公国」と位置づけ、宗教・法律・行政を尊重する高度な自治を認めました。これにより、フィンランドは独自の制度を保つ“国家の枠組み”を得ることができました。19世紀後半にはアレクサンドル2世が改革を進め、1863年に議会を再開し、フィンランド語を行政言語として認められました。鉄道建設や貨幣制度整備など近代化も進み、民族意識が高まりました。その後のロシア化政策が反発を招き、1917年の独立につながったそうです。アレクサンドル1世の自治体制と2世の改革が、独立国家フィンランドの基盤となりました。

そんなフィンランドの研修では、Home in Nature daycare centre Kesäkumpu（民間の自然保育園）Eestinmäen päiväkoti・Kivimies（公立保育所）・Oodi（市立図書館）・公立プレイパークの視察・見学や質疑応答、フィンランドの保育事情の解説講義受講を実施しました。

フィンランドの幼児教育は、Educare（教育と保育の統合）を基盤とし、子どもの主体性と遊びを中心に据えた体系です。今回見学した Pilke Home in Nature daycare centre Kesäkumpu（ピルケ保育園ケサクンプ自然園）では、その理念が日常の実践として鮮明に表れていました。登園は園舎ではなく近くの公園で行われ、自然の中で朝の会のような活動をしてから一日が始まります。その後は全クラスが森へ向かい、週5日のうち原則3日は天候に関わらず森で過ごすということでした。自然を「特別な活動の場」ではなく「日常の学びの環境」として扱う姿勢が印象的です。

森では、まず春の発表会に向けたリハーサルが行われました。これは卒園時に保護者に披露するものですが、密な練習ではなく、子どもたちの声や意見を聞きながら進められ、緊張やストレスとは無縁の穏やかな時間でした。その後は子どもたちがそれぞれにやりたい活動へと散っていき、就学前の子どもたちは木にハンモックを設置することから始め、うまくいかない時には周囲と協力しながら試行錯誤を重ねて進めていました。時には保育者が失敗すると、子どもが指摘する場面もあり、大人と子どもという上下関係ではなく、「一緒に過ごす仲間」としての関係性が自然に築かれていることが感じられた瞬間でした。これは、子どもも大人も同じ人間であり、互いに人権を持つ存在であるというフィンランドの価値観が基盤にあるからこそ生まれる光景だと考えられます。



子どもたちが、上手に設置したハンモック

園長先生より、園内活動の内容説明を受けましたが、絵の具を使った活動を多く取り入れているとのこと。ただ、保育者が決めるのは「絵の具を使う」という素材の提示までで、そこからの展開は子どもと共に決めていくといいます。園長は「ゴールではなく過程が大切」と話されており、何かを成し遂げることを目的化せず、子どもが試し、気づき、発展させていくプロセスそのものを価値として捉えていました。

また、障がいのある子どもの受け入れも行っているとのこと。医師の診断書を必要とせず、行政からアシスタントが配置される仕組みが整っていました。他の子どもと同じ環境で過ごすことが前提であり、インクルーシブ教育が制度としてだけでなく、園文化として根付いていることがわかりました。

全体を通して、ケサクンプ自然園は、自然の中での生活と探究を中心に、子どもが自ら学びをつくり出す環境を丁寧に整えていました。フィンランドの幼児教育の理念が、日々の実践として確かに息づいていることを実感する見学となりました。

Eestinmäen päiväkoti は、子どもが安心して自分らしく過ごせることを大切にした、公立の保育園です。実際に見学して感じたのは、環境そのものが子どもの主体性を支えるよう丁寧に整えられている点です。保育室は落ち着いた色合いで統一され、玩具や素材は子どもが自分で選びやすい位置に配置されていました。活動の切り替えも急いでいるようには見えず、子どものリズムを尊重する姿勢が徹底していて、遊びの中で自然に対話や協力が生まれるような雰囲気を感じました。保育者は必要以上に介入せず、子どもの気づきや試行錯誤を大切に見守る姿が見られました。園の保育は、ポルヴォー市が作成したローカルカリキュラム「一緒に気づいて、楽しく遊びながら学ぶ」というテーマを基盤としているとのこと。これは、子どもの経験や興味から学びが広がるというフィンランドの幼児教育の考え方を、園の日常に落とし込んだものだと思います。自然環境の活用も盛んで、散歩や森での活動は日常的に行われ、子どもたちは自然の中で自由に遊び、発見を仲間と共有しながら学びを深めていました。



子どもたち作成の、歓迎を表す日本国旗

また、園内ではインクルーシブな保育が自然に根付いていることも説明等から強く感じられました。14～15年前の幼児教育改革を経て、フィンランド全体で「すべての子どもが同じ環境で学ぶ」という考え方が浸透しており、保護者の理解も高いと聞きます。特別な支援が必要な子どもも、グループの中で無理なく過ごせるよう配慮され、保育者は子どもの気持ちや背景を丁寧に受け止めながらかかわるとのことです。

さらに、フィンランドでは年2回の個人計画作成と保護者面談が義務づけられており、園と家庭の信頼関係が非常に重視されています。保育者には高いコミュニケーション能力と専門性が求められ、子どもの育ちを共に支えるパートナーとしての役割が明確です。市内には私立園も数園存在しているようですが、補助等も整備されており、地域全体で子どもを育てる仕組みが機能していると知りました。Eestinmäen päiväkoti は、こうした市の理念とフィンランドの幼児教育文化を、日々の保育の中で丁寧に体現している園であると感じました。

エスポー市の Kivimies päiväkoti を視察し、まず感じたのは、前回訪れたポルヴォー市の園と共通する落ち着いた環境づくりです。白を基調として作られた空間や、子どもの主体性を尊重した保育の姿勢はフィンランド全体に浸透している文化だと改めて実感しました。一方で、Kivimies

は施設の規模が大きく、活動内容に応じて空間を柔軟に使い分けられるよう、多くの部屋が用意されており、遊びや学びを深めるための環境が非常に充実しているようでした。

特に印象に残ったのは、「言語と文化の先生 (Language and Culture Teacher)」が配置されており、多文化理解を促す仕掛けが豊富であることです。プロジェクト型保育として「自分の家族を紹介する」「自分の国の文化を知ってもらう」「世界旅行をしよう」といったテーマが設定され、子どもたちが自分の背景に誇りを持てるような仕掛けや、互いの文化を知る機会が丁寧に作られていました。そこには保護者も積極的に参加しており、園全体で多文化共生を育む姿勢が強く感じられました。



色々な国の重要な行事ごとがわかる展示物

また、エスポー市では登降園管理や連絡帳機能を備えた保育システムが市全体で導入されており、ICTを活用した運営の効率化が進んでいる点にも驚かされました。さらに就学前クラスでは、AIやICTを担当職員が自然に取り入れながら、子どもの興味を起点に学びを広げる実践が行われており、質の高い就学前教育の姿が見られました。

何より印象的だったのは、エスポー市全体で37名もの「言語と文化の先生」が配置されているという事実です。多文化家庭が多い地域特性を踏まえ、言語支援と文化理解を専門に担う職を制度として整えている点は、多文化共生を本気で支える姿勢の表れであり、非常に充実した支援体制だと強く感じました。

最後に、ヘルシンキ市のプレイパークを見学し、80年以上続くというこの地域の子ども支援の歴史の深さに強く心を動かされました。プレイパークは、単なる遊び場ではなく、長年にわたり地域の子どもと家庭を支えてきた「公共の子育て拠点」として機能しています。見学させていただいた Leikkipuisto Intia では、未就園児 (2~4歳) を対象としたクラブ活動が行われており、保育園入園前の子どもたちが小さな集団で安心して過ごし、社会性を育む場として大切にされていました。これは日本でいう「未就園児教室」に近いですが、より生活に根ざし、家庭と地域をつなぐ役割が明確であると感じました。

また、乳児を持つ家庭向けの活動や相談体制も整っており、保護者が気軽に立ち寄り、職員と話したり、他の家庭とつながったりできる環境が自然に作られていました。職員の方から「プレイパークの支援内容は、国や市の理念・要領に基づいており、保育園と同じ考え方で運営されている」と聞き、制度としての一貫性と、子ども観・保育観の共有が徹底されていることに深く感銘を受けました。



誰でも自由に利用できるプレイパーク

さらに、Leikkipuisto Filpus では、夏休み期間に実施される「15歳までの子どもへの昼食配布」を実際に見学できました。これは、どのプレイパークでも実施されているものです。多くの子どもたちが列をつくり、職員か

ら昼食を手渡されている姿をみて、地域の子どもを誰一人取り残さないというフィンランドの社会的な意思を表しているように思えました。食事を通して子どもの健康と生活を支え、同時に安心して過ごせる居場所を提供するこの取り組みは、単なる福祉ではなく「地域の文化」として根付いているように感じられました。

今回の見学を通して、プレイパークは遊び場以上の存在であり、長い歴史の中で地域の子育てを支える重要な基盤として発展してきたことを実感しました。日本の地域子育て支援を考える上でも、多くのヒントを与えてくれる貴重な学びとなりました。

そして、今回当初予定しておりませんでした、ヘルシンキ日本語補習学校の運動会に参加することができました。日本の伝統的な運動会をそのまま再現したような、温かく活気ある行事でした。開会式ではラジオ体操が行われ、徒競走や綱引きなど、日本の学校で馴染みのある種目が続きました。フィンランドの広々とした空の下で、日本の運動会の風景が広がる光景は、どこか懐かしさと新鮮さと不思議さと感じながら見学しました。

驚いたことに、運営主体は保護者でした。競技の準備、道具の運搬、進行、応援まで、保護者が自然に役割を分担し、子どもたちを支える姿が随所に見られました。先生が中心となる日本の学校とは異なり、家庭と学校が一体となって子どもたちの学びと成長を支えている雰囲気があり、コミュニティとしての強さを感じました。



多くの参加のもと行われた運動会

また、競技中の子どもたちは、勝ち負け以上に「参加すること」「一緒に楽しむこと」を大切にしているように見えました。異なる言語環境で育つ子どもたちが、日本語で声を掛け合いながら協力する姿は、このフィンランドの地で貴重な学びの場になっていると感じます。

日本文化の継承とコミュニティのつながりを象徴する行事であり、海外で育つ子どもたちにとって大切な経験になっていると強く実感しました。

その他、写真をいくつかピックアップ！！



使っている遊具等も、素材などにこだわりを持って準備  
(Pilke Home in Nature daycare centre Kesäkumpu)



ドキュメンテーション週誌。様々な形態で作成している (Eestinmäen päiväkoti)



ままごと遊び専用の部屋。複数用意されている  
(Kivimies päiväkoti)



遊びの環境も、丁寧に作られている  
(Leikkipuisto Intia)

フィンランド文化の勉強！！

フィンランド文化の学びが、やっぱりこの研修の学びをさらに深めてくれました！

